

さらに米軍はガブツ島に七日正午に上陸、巡洋艦と駆逐艦群による艦砲射撃がガブツ島、タナンボコ島に対し猛烈に行われ、両島は丸裸になるほどであった。続いてタナンボコ島に七日夜、上陸を試みた。夜陰に乗じて、舟艇六隻に分乗した米軍は島の北西部の横浜航空隊が主要基地としていた砂浜海岸へ殺到した。日本軍はここに簡易桟橋を海側に張り出し、筆者の調査では今は桟橋の跡形もない。航空燃料、ドラム缶を積み上げていた。米軍の舟艇が桟橋に近付いた頃、ドラム缶が火炎を起し、夜空を赤々と染めた。日本軍はこのチャンスに猛射撃を加えさらに突撃した。米軍は大混乱し、三隻の舟艇を残しほうほうの態で退却した。八日午前米軍は猛烈な艦砲射撃と爆撃を加え、午後にはガブツ寄りの海岸線珊瑚礁ぞいに攻撃を仕掛けてきた。

日本軍は十分に米軍を引きつけての一斉射撃を行い、米軍は動けず、後退した。夕方米軍は水陸両用戦車三台を先頭にガブツから珊瑚礁の海岸を渡って来た。十分引きつけての日本軍の突撃は玉砕覚悟の捨て身の戦いであった。戦車は次々と擱座し、火炎瓶で燃え上がったと記録されている。またしても米軍の攻撃は阻止された。しかし、横浜航空隊の戦力ももはやこれまでであった。最後の止めはその後、米軍の巡洋艦、駆逐艦による至近距離からする艦砲水平射撃であった。米軍はこれまでの戦闘で日本軍の戦力と洞窟陣地の位置を知り、洞窟を直接砲撃したのである。ここにおいてさしもの戦闘も八日夜まででほぼ終わったのである。

この戦闘で日本軍は玉砕したことになるが、実は桜井氏のように生き抜いた日本軍人が複数いたわけである。

三、ソロモン諸島国及びツラギ地区の一九九二年の状況

一九四五年戦争終了に伴い、ヘンダーソン飛行場の平和利用のために、首都をツラギ島から対岸のガダルカナル島のホエラ市に移した。さらにソロモン群島は、一九七八年英連邦の一つとして独立した。かつて日米が死闘を繰り広げたヘンダーソン飛行場が、今この国の表玄関としての国際空港として活躍している。

ソロモン諸島国の総人口は約三四万人、大部分はメラネシア系(九四・二%)で、ガダルカナル島約八万人、ホエラ市約三五〇〇〇人、ツラギ島約二〇〇〇人、ガブツ島、タナンボコ島、マカンボ島は〇である。ツラギ地区に限っていえば、五〇年前の方が遙かに栄えていた

といえる。ツラギ島には今、国営造船所二か所と漁業会社のみで、小さい小物店が三軒あるだけで、往時の首都をしのぶすがもない。またツラギ島に約一八〇人いた中国人は、ホエラ市に移り、中国人街形成の中核として活躍した。現在はその子孫及び新たに移住した中国人(台湾系)の経済力は、この国で大きな存在となっている。

ツラギ島にかつてあったゴルフ場は、島民のスポート場に。クリケット場は教会と住民の住宅地となっている。昔の総督府関係建物のあった同じ場所に、州政府が庁舎を置いている。またかつてあった大病院や、刑務所は今はなく僅かに土台のみが散見できる。そして港の設備の後が、国営造船第二工場となり、三〇〇トンぐらいの船舶の修理を行っている。さらに米軍が上陸直後作った西北地区のセプアペ魚雷艇基地が、国営造船所第一工場となつて一〇〇トン程度の船舶の修理を行っている。日本軍の洞窟は二八一高地付近に八か所確認されている。

戦闘中丸裸となつたガブツ島、タナンボコ島は今、鬱蒼としたジャングルに戻っている。一九九一年五月と八月、桜井氏の依頼でガブツ島及びタナンボコ島を調査した。その結果、ガブツ島には日本軍の洞窟一か所を発見し、岸壁には高射砲、海中には破壊された水上飛行機の残骸が確認された。タナンボコ島では洞窟五か所を発見した。桜井氏の入っていた防空壕と思われるものも発見した。タナンボコ島の北西部の三か所の洞窟は特に堅固で、防空壕を中心とした半径一五メートルぐらいの所に、高さ四メートルの土手が半円状に築いてあり、この中にたて籠もつた日本軍が圧倒的に優勢な米軍に抵抗したことがしのばれる。

ガタルカナル戦において、重要な位置付けにあるツラギ地区に関しての日本軍側の証言は前述の通りほとんどない。その意味でこの度の桜井氏の証言は、非常に貴重だ。特にタナンボコの戦いは、日本軍が太平洋戦争を通じて米軍の上陸を阻止した唯一の戦いであつた。しかもこの日本軍が地上での戦闘を主任務としない、地上戦闘の訓練も経験もない海軍横浜航空隊の戦いであるがゆえに、驚嘆に値する。しかし、当時、大本営はツラギ、ガブツ、タナンボコの玉砕の事実を一切報道しなかつたといわれている。

参考資料 防衛庁戦史室 南太平洋陸軍作戦 I / Guadalcanal Diary by Richard

Tregashis / The Battle of Guadalcanal by Samuel B. Griffith /

ソロモン群島政庁(イギリス)発行統計資料 / 太平洋諸島年鑑(英文)一九三九年版

筆者は、一九九二年、日本のODDAの一環としてソロモン諸島ツラギ島にある国営造船所の指導を行っている。

桜井さんがいたタナンボコ島



左のタナンボコ島と右のガブツ島を結ぶ橋のあと

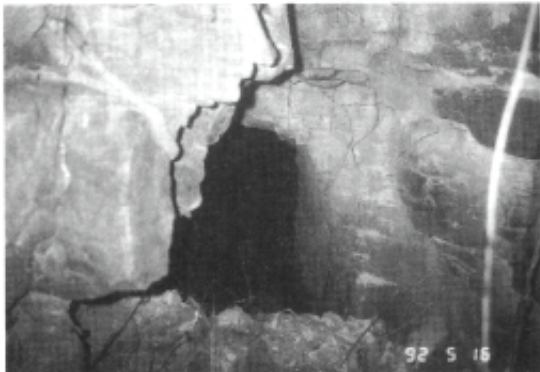


ガブツ島岸壁、日本軍の高射砲と水上飛行機の残骸が今も残る



桜井さん、宮川さん、ほかもう一人は自傷者で埋まったこの壕には入れず、勝田副長の命令で、C地点の小さい壕へ移った。この壕にいた宮崎司令以下、戦友たちは全員玉碎し、運命をわけた壕だった。

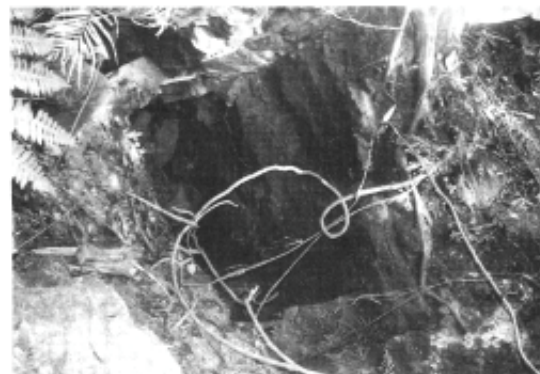
撮影／塘昌夫（'91年9月・'92年5月）



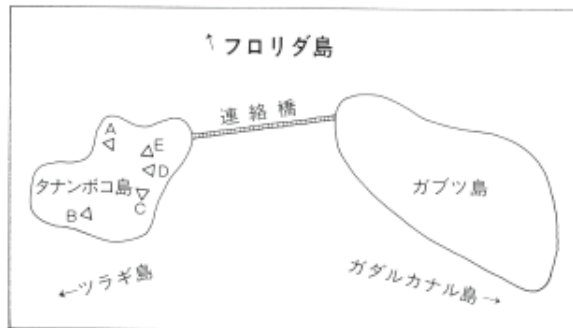
A地点の大きい壕



D地点の壕跡



E地点の壕跡



地獄の入口は今もあった！



桜井さんと宮川さんが入っていた小さい壕(通称、士官壕)の位置とほぼ一致するC地点の壕の跡。あれから50年、地獄の入口を上からのぞき込むと、半分埋まった形で、今も不気味に口を開けている。あの不発弾は？島主計中尉の軍票やトランクは、今も中に埋まったままなのだろうか？